

三宅島ふるさとだより



No. 22

平成23年7月1日 三宅島ふるさと再生ネットワーク東京事務局 TEL 03(3963)5678 Fax 03(3963)5697

住所：〒173-0005 東京都板橋区仲宿25-6 あすなろ福祉会内



イントロダクション クレジット 予告 前売券発売劇場一覧



あ、歴史的な大噴火から11年。三宅島の雄大な自然を舞台に、一人の少年と一匹の犬の目を通して、現代

家族たち。なかつた芯と

あらすじ
2000年8月の大噴火により、全島民が避難することに。三宅島で民宿「たいよう」を営む野山一家のわんこ、ロック。そのロックを生まれた時からずっと育てた少年・芯（土

師野隆之介）と、父ちゃん・松男（佐藤隆太）、母ちゃん・貴子（麻生久美子）、ばあちゃん・房子（倍賞美津子）。噴火時の離散、避難後の慣れない都会での生活、そしてロックとの苦渋の別れ。様々な苦悩・困難に直面しつつも、いつかみんな故郷・三宅島に帰って、ロックとまた一緒に暮らすことを決めてあきらめ

特別試写会のお知らせ
7月15、16日に三宅島にて行います。詳細は「広報みやけ」7月1日発行号にてお知らせします。

公開日
全国東宝系にて、2011年7月23日（土）公開。

皆様、ぜひお近くの劇場まで足をお運びください！

希望あふれる感動の物語

社会の中で失われつつある心と心のつながり、家族の在り方、故郷への想い、そして生きていく力を描く、実話から生まれた涙と希望あふれる感動の物語。

ロックがくれた勇気と希望が、日本中を照らします！

検証：三宅島 2000 年噴火災害

(検証*添付資料① 2011/07/1)

yell エール

「帰れる」と信じて

三宅島の火山活動のため 2000年9月から約4年5カ月間、全島避難を経験した。東日本大震災による福島第1原発事故で避難している周辺自治体と同じ状況だった。先の見えない避難生活を続ける被災者らを



思うと胸が痛む。

原発事故がいつ収束するかは分からないが、周辺自治体には国とは別に独自の復興計画作りを勧めたい。帰郷目標や、それまでの具体的な対応策を掲げられれば、住民の励みになるし、生活再建の道筋を描けるの

平野 祐康さん 三宅村村長

ではないか。三宅村は避難の数カ月後、5年後に帰島するつもりで計画を立て準備を進めた。

慣れない土地での長期の避難生活は、住民の孤立が心配だ。三宅村は村民の大半が都営住宅に入ったが、都会暮らしになじめず引きこもる人もいた。村では村民を集めて年に数回「ふれあい集会」を開いたほか、都内に借りた農地で一緒に農作業を行い、島の特産のアシタバなどを栽培した。避難先で過ごす被災者の方々には、必ず古里に帰れると信じ、苦境を乗り切ってほしい。今後、被災地の首長らともお会いし、三宅村の経験を伝えられればと考えている。

三宅島



避難先でも集落一緒に

火山ガスのために 2000年秋から4年半にわたり全島避難した東京都三宅村の島民組織「三宅島ふるさと再生ネットワーク」の佐藤就之会長(76)。

写真Ⅱは、都営住宅などに島民がバラバラに入居した結果、集落のつながりが壊れてしまったと振り返る。「心が休まるために、隣近所の知り合いが近くにいることが重要」と話す。東京都あきる野市の旧秋川高校

に子どもたちを集め、集団生活させながら学校に通わせたと誤りだったと思う。「ストレスで子どもたちがもたなかった。親から離すべきではなかった」

原発事故で避難指示が出た福島県の市町村は、かつての三宅村と重なる。「私も着の身着のまま、本土の東京へ向かう船に乗った。火山活動がどうなるのか、専門家もはっきりした見通しを言えず、2、3週間で帰れると思っていた」と語る。

三宅島で被災して

東日本大震災で人生観が変わったと友人が言います。絆を意識し、以前より強く、毎日を大切に生きたいと思うようになった。

私は00年の三宅島噴火災害で避難した後病気になる、そのまま東京で暮らしています。長崎の雲仙・普賢岳の噴火、阪神大震災、三宅島噴火と自然災害が多発してい

女の気持ち

まず。東日本大震災は原発事故という人災が追い打ちをかけています。

三宅島噴火では、避難生活中に自死、離婚、一家離散と新聞に載らない悲しい現実がたくさんありました。私は何度も黒服でお別れました。

私たちは避難生活の初期でほとんど蓄えがなくなり、村から借りた生活支援金を今も返済中です。

避難者の優遇特別枠で仕事に就かせてもらっても、島暮らしの長い

中高年に、満員電車での通勤は大変でした。わがままを言っている時ではないと気持ちを奮い立たせて働きました。

東日本大震災の規模は三宅島噴火の比ではありません。被災者はこれからどれだけ困窮を極めるか計り知れません。三宅島も復興途中で、雄山の噴煙が終息するまで

気が抜けません。

私のできることをしようと、手持ちの布で帽子を35個作り、岩手県のホスピスに送りました。いつか役に立つと献体登録も済ませました。

三宅島噴火でお世話になったせめてもの恩返しに、被災者に寄り添いたいと考える日々です。

東京都北区

葛西 梢 無職・68歳